

15-59 国債証券や株式等の所有権の価値の独立な運動

「国債証券だけではなく株式をも含めてのこのような所有権の価値の独立な運動は、この所有権が、おそらくそれがもついているであろう資本または請求権のほかに、現実の資本を形成しているかのような外観を確定する。すなわち、このような所有権は、その価格が独特な運動をし独特な定まり方をする商品になるのである。……一方では、その市場価値は、その権利名義によって取得される収益の高さと確実性につれて変動する。……この証券の市場価値はある程度まで投機的である。というのは、この市場価値は、ただ現実の収入によってだけではなく、予想され前もって計算された収入によって規定されているからである。……その価値は、つねに、ただ、収益が資本換算されたもの、つなわち、収益が幻想的な資本にたいしてそのときの利子率で計算されたものでしかない。だから、貨幣市場の逼迫の時期にはこのような有価証券の価格は二重に下がるであろう。第一には、利子率が上がるからであり、第二には、この有価証券を貨幣に実現するためにそれが大量に市場に投げこまれるからである。……嵐が去ってしまえば、これらの証券は、失敗した企業や山師企業を代表するものでないかぎり、再びもとの高さに上がるのである。恐慌中に起きるこれらの証券減価は、貨幣財産の集中のための強力な手段として作用する。

これらの証券の減価または増価が、これらの証券が表わしている現実の資本の価値運動にかかわりのないものであるかぎり、一国の富の大きさは、減価または増価の前もあともまったく同じである。……

すべて資本主義的生産の国には、このような形態で巨大な量のいわゆる利子生み資本または moneyed capital が存在している。そして、貨幣資本の蓄積というものの大きな部分は、生産にたいするこのような請求権の蓄積のほかには、すなわちこのような請求権の市場価格の蓄積、その幻想的な資本価値の蓄積のほかには、なにも意味しないのである。」

(大月版『資本論』⑤ P598F8-600B7)